

氏 名	のぶ とも けん じ 信 友 建 志
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 256 号
学位授与の日付	平成 16 年 7 月 23日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 人間・環境学専攻
学位論文題目	歴史認識の精神分析的考察 ——歴史認識論としての精神分析——

論文調査委員	(主 査) 教授 新 宮 一 成	教授 吉 田 純	助教授 佐 藤 義 之
--------	---------------------	----------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文は主体と歴史性との関係を主題とする。すなわち、歴史において、未だ書かれざるものという意味で潜勢的なものが、どのような在り方をしているのか、そして、それが歴史となっていく過程で、主体はどのように参与するのがその課題である。まず、一見このような潜勢性にたいして対立的なスタンスを取っているとされる、歴史の実証主義と相対主義が、実は「空虚な表象を詰め込んだカプセル状の自我」という近代の主体の構造から発した裏表の関係であることが認識される。その乗り越えのために、歴史の側からの主体に対する関わり合いによって生じる歴史空間の開け、という第三の道を本論文は提唱し、その理論的支柱として精神分析的な歴史認識の考察が要請された。

まず第一章では精神分析的な言語観から、ラングという概念を通じて「言語における切断面＝外傷、原光景といった出来事」を言語の原形態とし、その原－言語の運動から主体が構成されていくことが論じられる。その原一言語においては言語と存在が等価であり、そこに外傷的出来事として、純粋な差異という意味で同一でもある要素(=Un)が介入することで、主体化の契機が開かれる。第二章ではフロイトの心的装置論を通じて、外傷という契機を《他者》という内在化された翻訳装置を通じて表象化することで共時的な歴史へと変換していく主体化の過程が考察された。第三章ではこの主体化に安定した構造をもたらすものとして、主体の幻想を考察し、想像的な他者という媒介の設置により、《他者》のディスクールの強迫性を主体構造の反復に変換し、その構造の安定化に寄与するものとそれを想定した。第四章では上記の機構を具体的にフロイトの「狼男論」を通じて考察することで、主体の身体に刻印された根源的な文字あるいは固有名が症状の分析において主体の歴史の諸々の系の分割不能な交点として機能していることが明らかにされた。それが、言語の自律的、反復的な特徴をまとい、ハイデッガーの言葉を借りれば『言づけ』として、それ自体の自律的な循環を続ける。この固有名それ自体は還元不能であり、同時に諸々の象徴生産機構を作動させる純粋な差異でもある。その力により、主体は自らの具体的な歴史に捉えられると同時に、そこから歴史を再創造するということが導かれる。第五章ではこのような分析を元に、精神分析と言語行為論を交錯させることで、主体の具体的な発話による主体化の完成の道のりが検討された。主体は自らの発話によって制度的な現実の中で自らを確定し、自己を獲得するのではなく、他者に対してその言葉を与えることによって、他者に自らを委ね与え、他者に主体性を与えるのであり、そのことで自らの主体性が獲得されると論じられた。

しかし同時に、そうした構造を支える主体性の装置が現代において変容を見せ始めたことも、第六章においてメディア論、多文化間精神療法の実践を通じて指摘される。言語の自律性という設定は不変であるが、それを主体化へと構造化していくプロセスは、その主体の属する社会の紐帯のありようによって異なってくるのではないかと仮説が提示された。社会的紐帯から切り離された主体が自らの上にその回路を再設定し、孤独に反復を続けることで生まれたのが内面性というものではないかと考察した。対照的にその紐帯が維持されている社会においては、社会的過程の中で具体化、行動化することを通じて主体の抱える諸問題が処理される、と考えられた。

第七章ではここまでの分析を永遠性と時間性との相克の運動と整理することで歴史を考察した。非歴史的な永遠性として

の純粋な記憶と、それが時間的に整理されることで成立する歴史空間がまず措定された。その非歴史性とは、我々の内にありながら異他的なものであり、他者に属するものである。そしてそれが歴史学において歴史化されることで抑圧されると同時に、なお執拗に生起し続ける。この対立は、歴史学において一般的には措置される一回性と反復性の構造に等しいものである。一回的な出来事は、その一回性を純粋な差異性そのものと捉え直すことで、常に同一なものの反復と見なされうる。この純粋な差異性が、Un という概念で把握された。そして、いかなる歴史叙述の中にもこの等根源的なこの概念が残され、それが歴史叙述そのものの可能性を基礎づけているということが、歴史における潜勢的なものの在り方であり、そのことによって歴史はみずからのうちに潜勢的なものを残すのである、と結論づけられた。この潜勢性の故に、我々は歴史的な多様性を一つにまとめ、歴史の中に固有名という形で可読的なものとしてとどめておくことができる。歴史とはその固有名の贈与の瞬間であり、そして歴史家と精神分析家の作業に共通するのは、その固有名を与え、そこに内実を与え、そして奪い与え直すことにほかならない。技法的には、つねに潜勢的なまま残されてしまうものを語らしめるという点で、精神分析を歴史認識論としてとらえうる根拠がみいだされる。そして、歴史家と精神分析家はともに自らもまた、その言葉によって開かれた共通の歴史空間に自らをおき、言葉を紡ぎ、そこに新たな名を贈ることを目指すものとなる。以上が歴史における潜勢的なもののステイタスを精神分析的な観点から考察したことの結論である。

論文審査の結果の要旨

歴史学における物語論論争、精神分析理論における外傷理論論争などに見られるように、物語られた歴史において事実とは何か、という問いはいまや学際的に共有された急切な課題であると言って良い。本学位申請論文はその課題に対し安易に結論を下すのではなく、そうした問題設定そのものを生み出した主体性と歴史性の基礎的な構造を考察することで答えようとしている。そして、この視角からきわめて広範囲にわたり問いの構造的基盤を明るみに出しており、そこに大きな意義が認められる。

本論文は、その理論的支柱としてラカンの精神分析理論を全面的に援用している。その資料操作は未発表の諸講義を含む極めて包摂的なものであり、多くの点でこれまでのラカン研究の面目を一新したといつてよい。とりわけ、ラカンの晩年の断片的な言語観を資料群から丹念にフォローしていくことで、ラカンがハイデッガーらと共有していた言語に対する問題意識、すなわち、自律的な言語の運動から主体が析出されていく過程の考察が可能になっている。本論文はその過程をとりわけ「歴史」として考察することで、いわゆる歴史相対主義とも実証主義とも違った出発点から歴史叙述のありかたを見直しているという点で独創的なものとなっている。

このような構想の下に、本論文ではまず第一章から第三章で、言語の自律的な運動の中から析出された主体がどのように安定した構造を確保していくのかが論じられている。ラカンの晩年の言語観、ララングという概念を断片的な資料群から網羅的に拾い上げて考察し、さらにフロイトやフェレンツイの再評価という精神分析の思想史的再検討を基盤に、主体が言語の運動の中に捉えられつつも、それを幻想の構造の中で歴史化させ、自らの中に内在化させていく過程が考察されている。

第四章は本論文全体の核となるもので、フロイトの古典的な症例の再検討を通じて、言語の運動の中から主体性が析出するまさに歴史的な一点をつかみ直すことにその目的が置かれている。ここでは、ラカンの文字および固有名という概念が、主体の歴史の分割不可能な結節点として措定され、主体と言語との根源的な関係として説明されている。

第五章、第六章では第四章の基礎論的な試みを応用した学際的な試みがなされている。第五章では精神分析と哲学、とりわけ言語行為論とが交差され、精神分析的な場での言語の意義を検討することで、他者に言葉を委ねることから生まれる主体性が論じられている。第六章では現代における社会学的な二つの課題、すなわち、メディア化が進む社会での主体と、多文化・多民族化が進む社会での主体に焦点が当てられている。この二つの課題のいずれにおいても、内面性を近代的主体の特殊性として相対化する試みが現在勃興しつつあるのではないかと、という提示がなされている。

結びとなる第七章では、歴史学のアポリアの一つ、一回性と反復性という問題が、ここまでの分析を受けて歴史における潜勢的なものの位置づけを見直すことで止揚されると論じられ、そのことが全体の結論とされている。

本研究の独創的な点は、精神分析を通じた基礎論的な考察を基にすることで、主体性の構造化のさまざまな様態という思想的な問題が、言語から主体が析出される過程の差異として統一的な視野の元に位置づけ直されていることにある。この

ような基礎論的試みにより、歴史相対主義と実証主義双方を支える近代の主体の構造が歴史叙述という具体的な状況下で浮き彫りにされたことが、極めて革新的な意義を持つものと認められる。さらには、そのように近代の主体性の構築過程をフォローしていくことで、現代的な主体性構造の変容を具体的な諸現象の学際的研究を通じて考察する理論的基盤が構築されている。

以上のように、本学位申請論文は精神分析的な観点から歴史叙述の基本構造を解明し、近代の主体性の構造化過程とその現代における変容を基礎論的に捉えることに成功している。論文の各章はすでに学術誌に掲載され、主体と歴史性の関係の現代的諸様相に対する学際的な研究として評価を得ている。以上の点で、本学位申請論文は、人間の全体的現実を環境との関わりに沿って解明することを目指して創設された人間・環境学専攻人間存在基礎論講座の理念に適ったものといえる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成16年4月8日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。